2-7.額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致

(1)はじめに

市東部の額田地区は、三河高原の西端に位置している。額田東部には標高 400 メートルから 600 メートルの山々が連なっており、最東部には本市最高峰の本宮山が位置している。これらの山々は、豊川市との市境を形成し、西三河と東三河の境界となっている。額田地区はその 98 パーセントが山地であり、南部の男川と北部を流れる乙川が作る渓谷沿いの平地に大小の集落が点在する。

北部の乙川水系は花崗岩帯で、谷底が浅く広く発達した地形であるため耕地が比較的得やすい。古く旧石器時代の西牧野遺跡や縄文時代の牧平遺跡などの遺跡が形成されてきた。南部の男川水系では領家変成岩類の広がる急峻な山とV字谷が多くみられ、山の斜面が棚田として利用されてきた。鎌倉時代から室町時代の中頃までは足利氏とその一族の勢力が入り込み、戦国時代には日近城(桜形町)を拠点とした奥平氏が渓谷ごとに奥平庶家を配置し、一帯を支配した。江戸時代には約 50 か村に分かれ、幕府領、岡崎藩や鳥羽藩、西大平藩等の大名領、戸田家や巨勢家等の旗本領、天恩寺等の寺社領が入り組み、領主も入れ替わった。額田地区では、このような自然条件の違いに適応しながら、独自に営まれてきた人々の暮らしと民俗事例をみることができる。

(2)千万町の神楽

千万町の神楽は八剱神社(千万町町)で４月第３日曜日の春祭りに豊作と悪魔祓いの願いを込めて奉納される神楽である。

八剱神社は、文永３年(1266)創建と伝えられ、同年の棟札が残されている。本殿は絵様等の様式から江戸時代後期文化年間(1804～1817)頃のものと推定される。

宝暦元年(1751)の文書には、この年の祭礼で神楽を舞ったという記録が残っている。ここで奉納される神楽は獅子舞神楽である。獅子の頭をつけ女物の着物を身につけた舞方が舞うため、嫁(娘)獅子神楽とも呼ばれ、その起源は歌舞伎を取り入れた獅子芝居であるとされる。

図2-7-1　八剱神社

図2-7-2　千万町の神楽　八剱神社での神楽奉納

図2-7-3　千万町の神楽　若宮社での神楽奉納(ホラの舞)

祭礼当日、朝８時より関係者が神社にて幟(のぼり)、神輿、獅子頭等の準備を行う。午前９時から八剱神社境内の矢場では祭礼弓の参加者が弓射を始める。金的中するまで神輿渡御(とぎょ)のお練はできないとされ、弓射は祭礼の重要な役割を担っている。弓射と並行して、午前 10 時に開始される神事の後半で神楽が奉納される。午後２時頃には、送り囃子が奏される中、若宮社への神輿渡御となる。囃子の音を聞き、集落の人々が行列に加わる。若宮社に到着すると、神官らの参拝が行われ、その後、神楽が先程よりも賑やかに舞い、見物人を楽しませる。午後４時頃、戻り囃子が奏される中、神輿は若宮社を後にして八剱神社へ還御(かんぎょ)する。

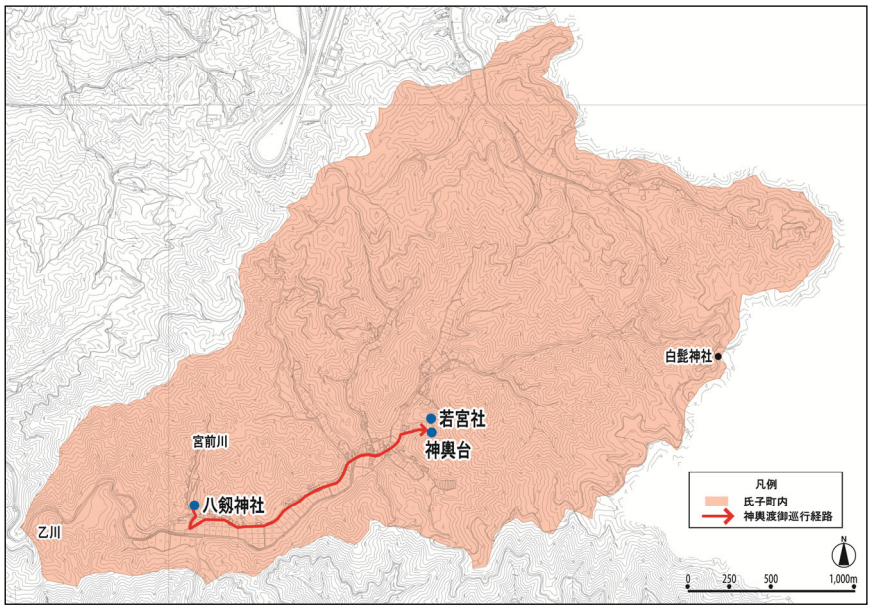

図2-7-4　千万町の神楽　御輿渡御巡行図

(3)須賀神社の祭礼山車と祭りばやし

額田地区の中心となっている樫山町にある須賀神社では「樫山の山車祭り」と呼ばれる春の祭礼が行われている。須賀神社は、本殿に永正10年(1513)の棟札があることから、室町時代後期には創立されていたと知れる。現在の本殿は建築様式から18世紀中期の建物と考えられる。

図2-7-5　須賀神社

祭礼は口伝では江戸時代から続くとされ、明治８年（1875)の『祭礼記』に当時の様子が記されている。旧暦６月の祇園祭として催されていたが明治末期より４月14日となり、近年は４月第２日曜日が祭礼日である。綱を氏子総出で曳く様子から、「蟻子祭り」とも呼ばれていた。

図2-7-6　須賀神社から神明宮へ祭礼山車の巡行

春のうららかな日の中を芽吹き始めた山々を背景に、山車と花車に続き、提灯、幟等のお手道具と神輿の行列が樫山町内の男川河畔にある神明宮までまち中を渡御する。神明宮では祭囃子を奉納し、夕刻に須賀神社へ帰着する。現在、山車は４台あり、明治28年(1895)頃製作の竜神丸(原組)、同じころ能見町より譲り受けた恵比寿丸(仲組)、鳳凰丸(庄野組)、平成10年(1998)新造の新若丸(新居野組)で、河瀬・宮北市組は花組と称し、花車(チャラボコ)で参加している。祭り囃子はこれらの山車の上で演奏され、囃子の伝承には、それぞれの組が

工夫・努力をしている。

また、神明宮で行われる年番の組による「御照覧」は囃子を神に奉納するだけでなく、囃子の型を守り伝える意味もある。

祭りの準備は、３月下旬から須賀神社の傷んだハギコ(ハギの枝製玉垣)を替えるため、ハギコ集めをすることから始まる。ハギコ作りは年番の役目で、祭礼の２週間程前に傷んだ所を作り変える。前日には、御照覧舞台作り等の準備を行い、当日は朝から各組が山車の飾り付けを須賀神社境内で行う。御神体を神輿へ移す時は、拝殿の幕が降ろされ、神主と神輿を担ぐ者以外は拝殿より外に出る。

祭礼は午前 11 時 30 分、山車のお祓い後に年番組を先頭に宮出となる。４輌の山車に続き、お手道具(御神灯、梵天、赤提灯、鉾等)、神輿と続く。午後１時頃、まちの中心である４叉路の辻にて中休みをし、ここで花組が合流する。辻の特設舞台では余興が行われ、午後２時頃神明宮に向けて出発する。神明宮に到着後、式典及び「御照覧」が行われ、年番を務める２組がそれぞれ特設舞台において、お囃子を披露し、午後３時 30 分に神明宮を出発する。午後４時 30 分頃、須賀神社前に到着し、祭りのクライマックスともいえる境内横の急な坂を順次、山車、花車を上げていく。

図2-7-7　神明宮での祭り囃子奉納(御照覧)

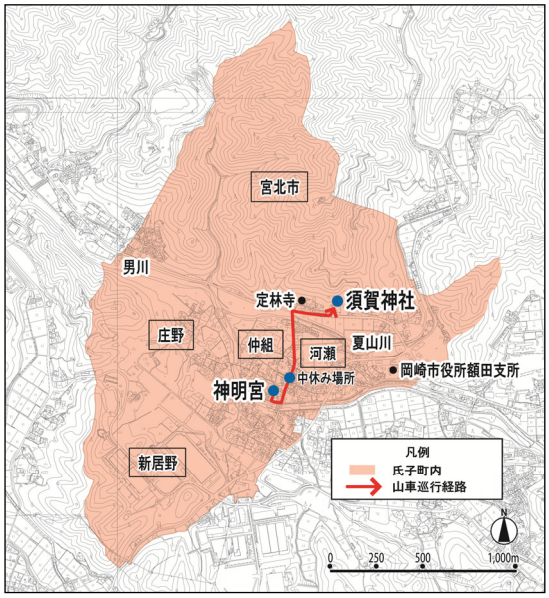

図2-7-8　須賀神社の祭礼山車巡行図

(4)夏山八幡宮の火祭り

夏山八幡宮(夏山町)は、平針、寺平、柿平、鬼沢、寺野の５集落の総氏神で、由緒書によれば、額田部貞春が三河国夏山郷柿平を開き、継体天皇 25 年(531)に祖神を祀ったのが始まりとされ、元慶４年(880)に応神天皇始め、６柱を合祀し王宮八幡宮と称し、後に夏山八幡宮と改めたと伝わる。棟札によると、一間社流造の本殿

図2-7-9　夏山八幡宮

は明治 27 年(1894)、拝殿は明治 12 年(1879)、神楽殿(舞殿)は昭和 10 年(1935)の建立である。舞殿は、幣殿と拝殿の間に建てられている。また、火祭りに使用したといわれる永禄元年(1558)の銘のある獅子頭が宝物として伝承されている。

火祭りは、旧暦９月９日近くの土曜日に夏山八幡宮境内で行われる勇壮な火祭りである。町内の柿平・平針地区が１年ごとに当番となり祭りを執行している。１年交代で、祭りを行うようになったのは、明治 36 年(1903)からである。

火祭りの準備は当日の午後０時30分頃から行われる。境内周辺の森から鉈でスギ・ヒノキ以外の生木を伐採し、拝殿前の広場に高さ３メートルほど積み上げて「ソダ山」を築く。そして厄男や若者から選ばれた「太夫(たゆう)」と呼ばれる鬼役が、白装束に身を包み水垢離(みずごり)し、潔斎を行う。水垢離の場所は、担当の集落で異なる。柿平は八幡宮裏手にある集落の庚申を祀る川の淵で、平針は集落の山中で不動明王を祀る滝である。その後、八幡宮に戻り、拝殿内で神火を熾(おこ)し、神降ろしを行う。この後、祭りはソダ山に火をつけて、面を被った鬼と鬼の師匠的な役割を果たす「ババ」が様々な所作事を行うことで進んでいく。鬼はババの所作事を真似るが、上手く真似られないとソダ山から燃え木を持ち、境内の参拝者を追いかけ回す。

参拝者は「ボケ、ボケ」等と鬼を囃し立てながら逃げ回り、両者が一体となって祭りを盛り上げる。鬼の持つ燃え木に打たれるとその年は病気にかからないとされる。

図2-7-10　夏山の火祭り　ソダ山の点火

図2-7-11　夏山の火祭り　鬼追い

図2-7-12　夏山の火祭りの位置図

(5)当(頭)屋祭祀

当(頭)屋とは、神社の祭りや講等に際し、神事や行事の世話をする人、またそのイエのことをいう。当(頭)屋が重要な役割を担って神社の祭祀が行われるため、当(頭)屋祭祀というのである。現在、当(頭)屋は１年交代で務めることが多く、その選出は紙クジあるいは家並順や帳簿等の記載に基づき輪番で行うことが多い。

①宮崎神社「オトウの神事」(オトウダイコン)

明見町の宮崎神社には、オトウダイコンと呼ばれる神迎えの神事が伝えられている。宮崎神社は、須佐之男命等を祭神とし、創立は菅生神社(菅生町)の由緒に天平宝治元年(757)に播磨国広峰社より牛頭天王を勧請されたと記され、この時に万足平より現在地に天王宮として遷座され、明治当初に宮崎神社と改称された。寛永９年(1632)の棟札が残されており、この時に再建されたと伝えられるが、本殿は虹梁の絵様等からみて、江戸時代中期の元禄～宝永年間(1688～1711)頃の建立であると考えられる。

奥平氏が武田氏と戦った滝山合戦(天正元年(1573))の戦勝祝いに端を発すると伝わるオトウの神事(オトウダイコン)は、神社の氏子全体の行事としてではなく、明見町の行事として旧暦 11 月１日に行われる。神事は当屋制をとる祭祀で、オトウとは神事に用いるオトウダイコン(大根の味噌煮)を準備する役割を担う当屋を指す。オトウとなる社守は、毎年神事後にクジで２名選出され、明治 32 年(1899)から昭和 35 年(1960)までの記録が納められた箱を引き継ぎ、前年度の社守２名と共に任にあたる。以前は、オオトウ、コトウとイエを区別し、オオトウのイエが輪番で当屋を務めていた。神迎えの２日前からオトウダイコンの仕込みが行われる。使用する大根は各戸から２～３本集められ、皮をむいた後長さ５寸(約15センチメートル)の輪切

図2-7-13　宮崎神社

図2-7-14　オトウダイコンの準備

図2-7-15　オトウダイコン

りにする。一昼夜かけて水煮及び調味液で味が染み込むまで煮込む。調理する大根は 200～250 本に及ぶ。この時、同時に神饌（しんせん）の一つで「オシロジロ」と呼ばれる洗米をすり鉢で粉状になるまで擂（す）り、水を加えてどろどろにした液状のものを準備する。当日、朝６時からの神事には各戸から男性１名が参列し、社守がオトウダイコンを献供し神迎えを行う。神事の後、直会（なおらい）にてオトウダイコンが振舞われる。

図2-7-16　オトウダイコンの位置図

②石座（いわくら）神社「神迎え神事」（アマザケトウ）

オトウダイコンの神事の１週間後に行われるのが、石座神社（石原町）の神迎え神事、アマザケトウである。

石座神社は、天照国照彦天火明命（あまてるくにてるひこあめのほあかりのみこと）等を祭神とし、社伝で創建は明らかでないが南設楽郡東郷の式内社石座神社から勧請されたとされ、本殿についても棟札等の建立時期を示す資料はないが、虹梁や木鼻の絵様から江戸時代中期頃の様式と考えられる。昭和５年（1930）には拝殿、幣殿、渡殿が改築されている。

図2-7-17　石座神社

アマザケトウは、神社の六座社に「シロジロ」と呼ばれる粢（しとぎ）と大根で作った船に白神酒（甘酒）を入れた神饌を供える神事である。神事の際に甘酒を献じる当屋をアマザケトウと称し、毎年４名がクジで選出される。選出されたアマザケトウは神事前日にオコモリをし、祭礼の準備と神饌の調整を行う。当日早朝には境内脇の室合地（むろごうち）川で禊を行った後、神事に臨む。

図2-7-18　大根舟・甘酒・シロジロ

これら当屋制をとる祭祀は近畿地方を中心に広がっており、岡崎市域ではあまり見られな

いものである。額田地区では旧来とは少し変貌しつつも、現代のライフスタイルに合わせて当屋制の祭祀の形態を維持している好例である。

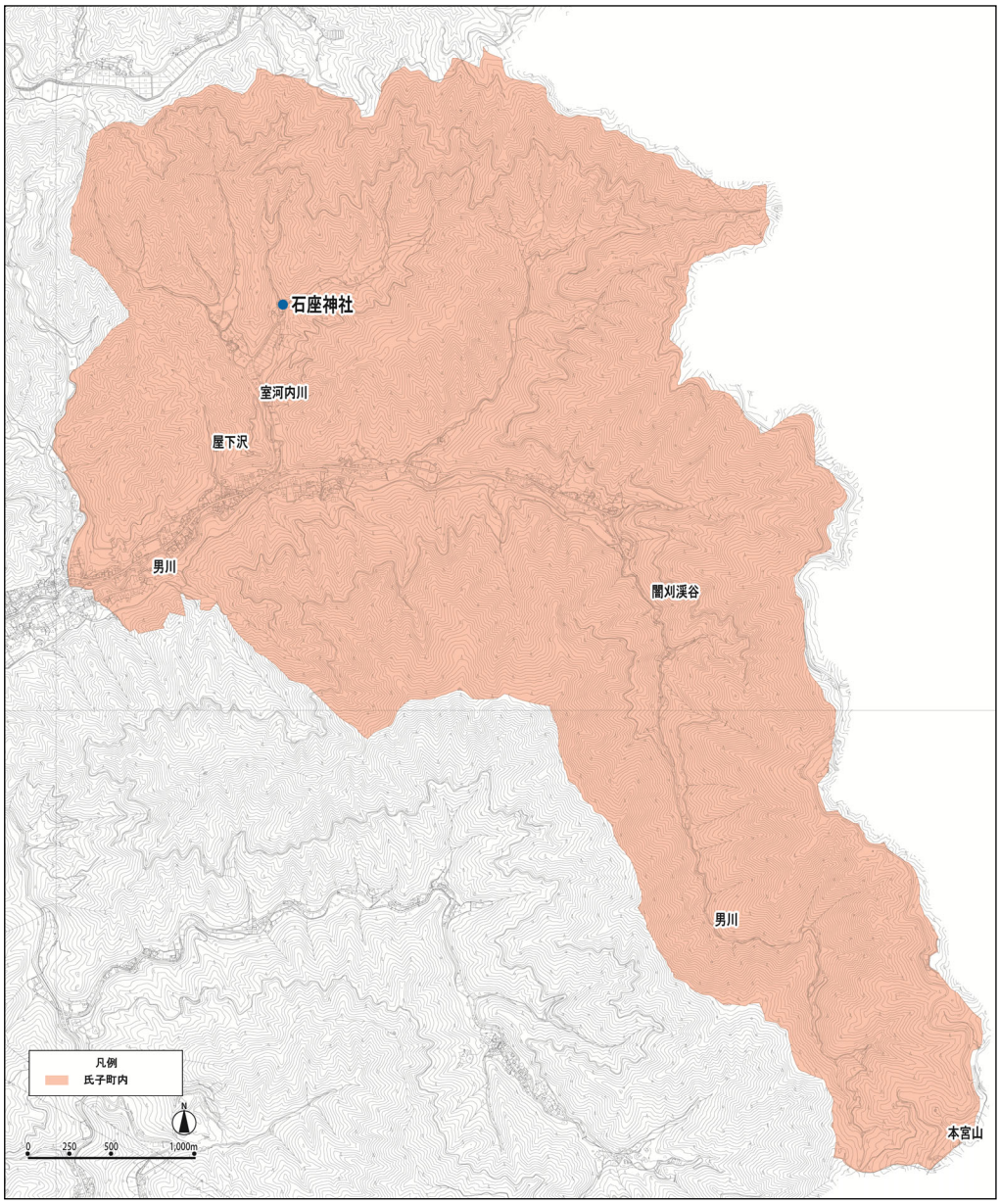

図2-7-19　アマザケトウの位置図

(6)コト八日行事

コト八日とは、２月と 12 月の８日に行われる行事の総称であり、全国各地で様々な行事が行われる。２月８日をコトハジメ、12 月８日をコトオサメと呼ぶ。(地域によっては逆になる。)愛知県内で現在もコト八日行事を行っているのは、北設楽郡と大代(おおじろ)町と雨山(あめやま)町など数カ所のみで全国的にも分布の西端である可能性が高い。大代町と雨山町では、２月８日のコトハジ

メに、田畑や山の仕事を開始するにあたり悪霊を３体の藁人形（殿様・姫・下郎）に憑依させて、子どもが「２月８日のコトハジメ」と唱え、鉦や太鼓を鳴らしながら集落境まで送る「オカタ送り」（オカタ＝憑依させる人形とコシのことを指す。）が行われている。

①大代町の事例

大代町のコト八日行事は、永禄４年（1561）創建の曹洞宗正泉寺に集合し、和尚による読経、お祓いが行われる。お祓いが終わると、子ども達は、鉦（１人）、太鼓（２人）、人形（３人）、御幣（１人）の順番に並び寺を出発する。鉦１回、太鼓１回「２月８日のコトハジメ」と唱えながら行く。大人は、子ども達を送り出すとすぐに百万遍の数珠を取り出し、各戸より参加した大人達が車座になり、念仏が始まる。子ども達は、集落境に到着すると、人形と御幣を置き、軽く拝み、元来た道を決して振り返らずに、寺まで言葉を発せずに帰っていく。寺に着くと、百万遍も終了となる。昭和 30 年代まではそれぞれの家で八日餅をついて準備をした。コトオサメ行事（12 月８日）も昭和 50 年（1975）頃まで行われていた。

図2-7-20　正泉寺

図2-7-21　大代町のオカタ送り

図2-7-22　村境のオカタ場

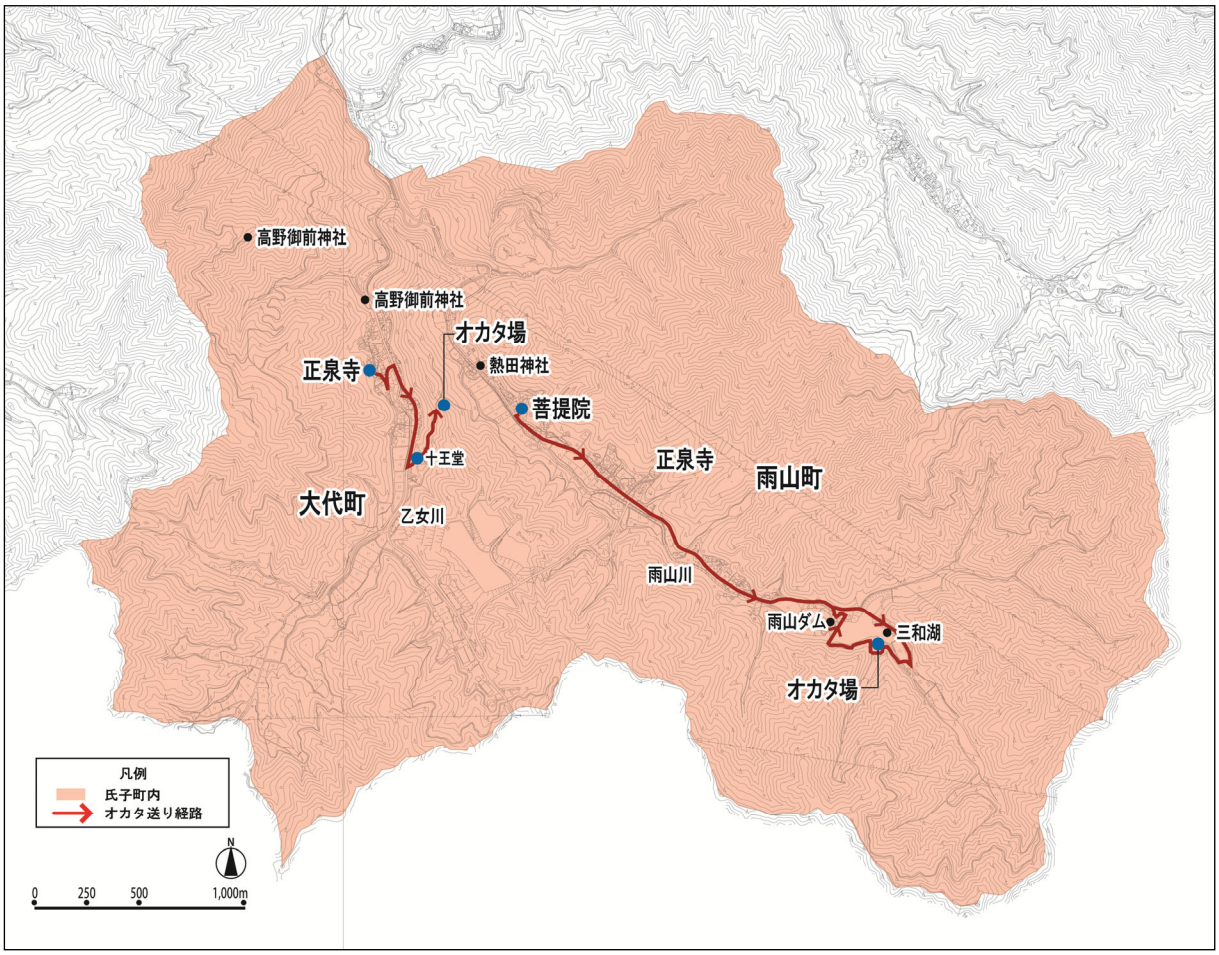

図2-7-23　オカタ送りの位置図

②雨山町の事例

菩提院は曹洞宗に属し、天文元年(1532)以前の創建で、棟札によれば元禄５年(1692)に本堂が建立されている。入母屋(いりもや)造り銅板葺き(旧茅葺き)、前面に広縁を通し、その奥に前後２列横３列の６室を構える方丈形式をとっている。禅宗寺院の本堂は方丈型が一般的であるが、ここではその前に露地と呼ばれる土間を通している点に特徴があり、前面土間六室型の平面形式をとっている。江戸中期の貴重な建造物である。

図2-7-24　菩提院

雨山町のコト八日行事は、菩提院に集合し、和尚による読経、お参りが行われる。その後、子ども達は、鉦(１人)、コシに乗せた人形(２人)、ハタ(２人)の順番に並び、「２月８日のコトハジメ」と唱え、鉦を２回鳴らしながら行く。片道３キロメートルのオカタ場に到着すると、人形とハタを置き、手を合わせてお辞儀をし、振り返らず黙って帰る。

図2-7-25　雨山町のオカタ送り

図2-7-26　コシと人形

(7)万足平（まんぞくだいら）の猪垣

額田地区では祭礼のみならず、人々の生活により密着した事象として石積み文化が発展している。山間地という限られた耕地を補うため、緩斜面に平坦面を形成した石垣棚田や耕地を猪鹿等の獣害から守るための猪垣、家屋の土台となる石垣等、額田地区南部の男川水系に分布する領家片麻岩を巧みに積み上げる技術が今に伝わる。領家片麻岩は節理（せつり）により板状に割れるため、ほとんど加工せずに原石のまま石積みに利用できる利点があり、他の材料に比較して容易に築造できたものと考えられる。

図2-7-27　万足平の猪垣（中金町）

図2-7-28　孫左衛門の石垣（淡渕町）

猪垣は、高さ 1.6 メートル～２メートルで、石を垂直に積むものが大半であるが、イノシシに飛び越えられないと思わせるように山側に反らせて積んだものも見られる。この地域に特徴的で全国的にも希少な文化財である。建造時期は江戸時代中期から開始され近代まで続いており、築造方法もいくつかの形態・様式が確認されている。その総延長は 50 キロメートル以上とも推計されている。

額田地区の中金（なかがね）町有文書には寛政４年(1792)に「猪垣」の記載があり、石原町有文書には享和３年(1803)に「夥（おびただ）しく罷（まか）り出た」猪、鹿、猿を防ぐため「金子を借り入れ石垣を積み候」、天保５年(1834)「猪鹿之垣」とあり、近世から猪垣を築き耕地を獣害から守ってきたこ

とが記録されている。

県指定有形民俗文化財に指定されている「万足平の猪垣」では、高さ約２メートル、底幅１メートル、上幅 0.6 メートルの造りで現存延長 612 メートルあり、文化２年(1805)と天保３年(1832)の２度にわたり築かれたという文献史料も残されている。規模・形態・様式・残存状態・文献史料等から、猪垣の代表的物件であるといえ、加えて立地条件・保存管理体制等の面からも、地域の文化遺産として活用し、地域活性化に結びつける好条件を備えた存在となっている。

図2-7-29　石積み講習会の実施(万足平を考える会)

平成 17 年(2005)に「万足平を考える会」(中金町)が地元で立ち上がり、地域住民や学生・児童への石積み講習会を実施し、保存・普及を図っている。

現在も、猪垣に囲まれた田畑で耕作が行われている。山間地の急峻な山林の裾と耕地の境に整然と巡らされた石垣列は、耕作地を大切に守ってきた人々の意志が感じられる景観である。

(8)おわりに

額田地区は岡崎市東部山地の急峻な山林の間に営まれる山里を背景としており、山間部に通じる街道により、岡崎市街、豊川市、信州とも関わりながら特有の文化を育んできた地域である。近世の額田地区には 52 か所ほどの村々があり、幕府領、大名領、旗本領、寺社領が入り組み、複雑な支配を受けていた。また、それ以前は豪族の支配拠点を中心に形成された村や戦乱を避けて住み着いた人々の村が混在していた。これら住民の歴史的、経済的な成り立ちから、様々な組織が生まれて強い結びつきが形成され、こうした結びつきから、毎年、男川本流の井堰(いせき)から通じる用水路から田へ井道を普請し、また、炭焼きや茶の栽培等の生業も続けられている。

このように額田地区には地域の紐帯(ちゅうたい)[1]の中心ともなる社寺や集落を舞台として、各地区の個性あふれる民俗行事と調和した景観が形成されており、山里のくらしとそこに息づく伝承文化が織りなす歴史的風致がある。

[1] 社会を形づくる結びつき。

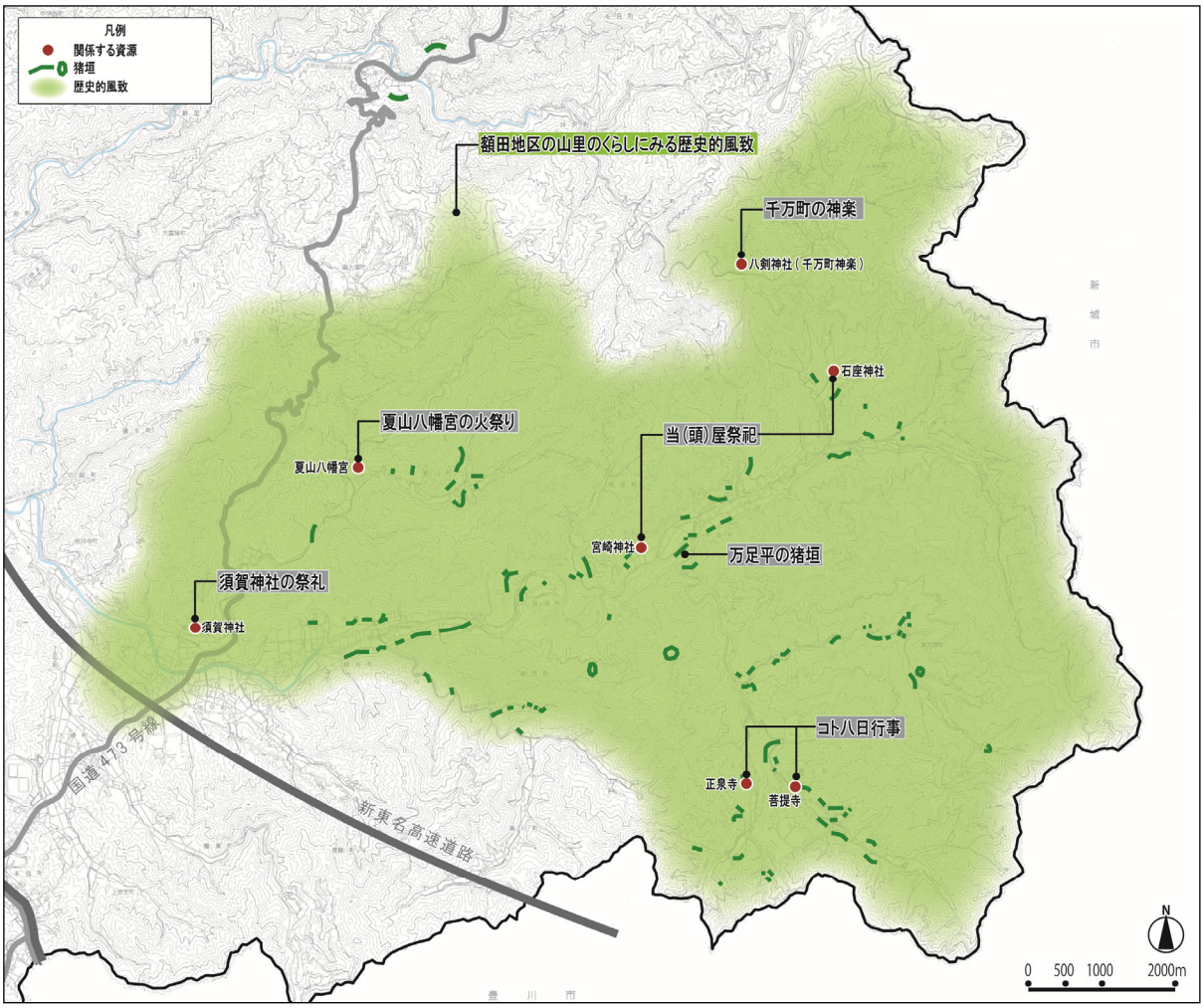

図2-7-30　額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致の範囲

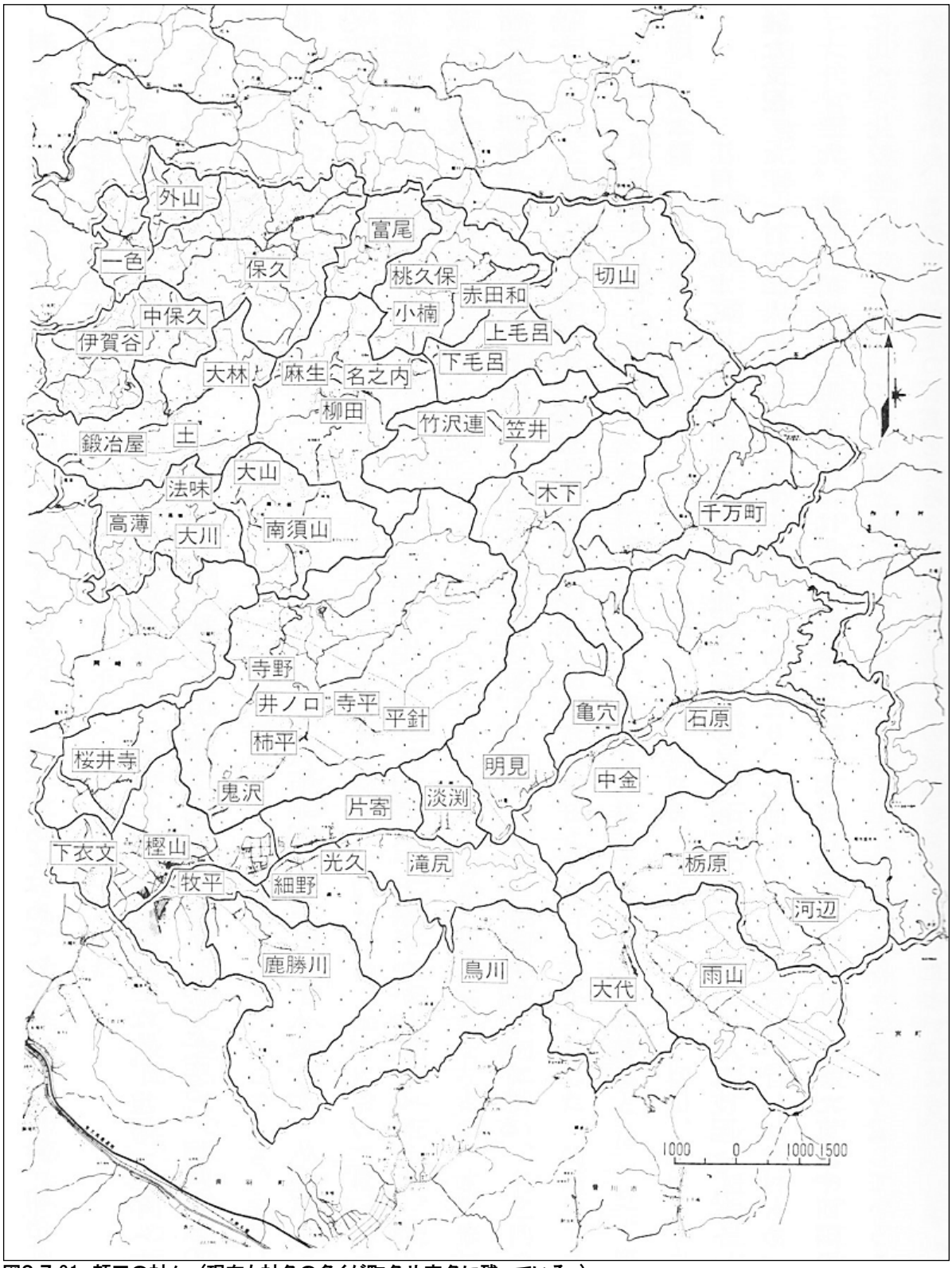

図2-7-31　額田の村々（現在も村名の多くが町名や字名に残っている。）